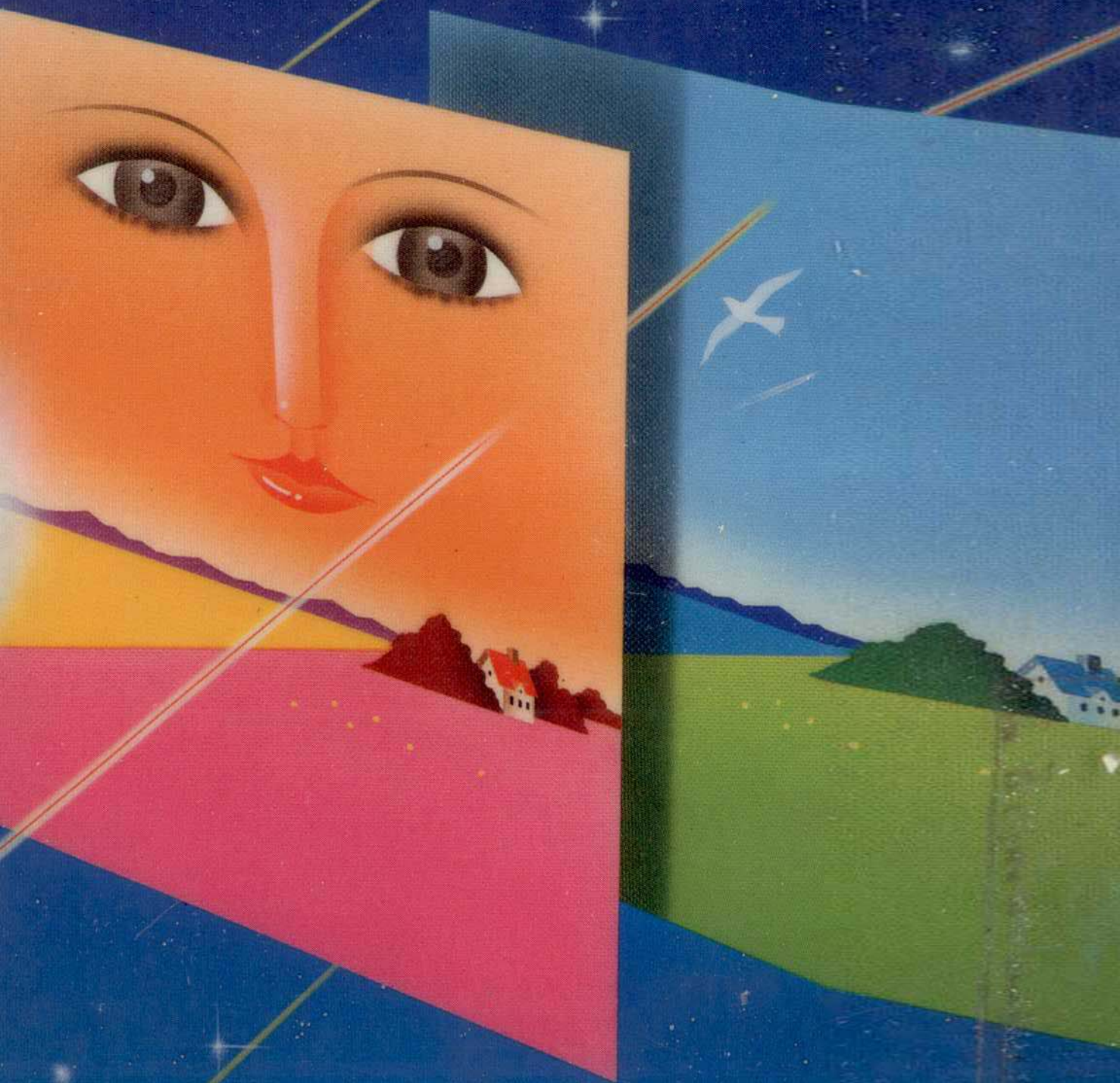


COBALT-SERIES

SFサスペンス

逃げ姫

眉村 卓



集英社文庫

まゆむら・たく

昭和9年10月20日、大阪生まれ。大阪大学経済学部卒。
日本ペンクラブ、推理作家協会、SF作家クラブ会員。
『消滅の光輪』『なぞの転校生』『ねらわれた学園』『思いあがりの夏』『地獄の才能』『ねじれた町』ほか、コバルトシリーズに『孔雀の町』『月光の底』『侵入を阻止せよ』などがある。趣味は写真を撮ること、柔道。

逃 げ 姫



COBALI-SERIES

昭和58年4月15日 第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

昭和62年7月25日 第11刷発行

著 者 眉 村 卓

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式会社 集 英 社

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-10

電話 東京 (230) 6171 (販売)
(230) 6268 (編集)

印刷所 株式会社美松堂印刷所

中央精版印刷株式会社

© TAKU MAYUMURA 1983

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-610557-8 C0193



COBALT-SERIES

SFサスペンス

逃げ姫

眉村 卓

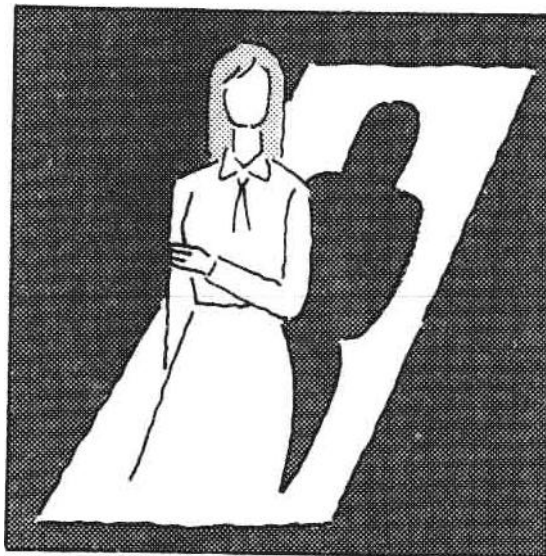
集英社文庫

目次

逃げ姫	5
見知らぬ私	43
信じきれない	87
彼が消えた	161
奇妙な夜	231

カット／小沢和夫

逃げ姫



1

入学式のあと、遠藤^{えんどう}みぎわは、キャンパスの通路にひしめく各クラブのデモンストレーションの前を、歩いて行った。

全く、いろんなクラブや同好会がある。話には聞いていたものの、これほど種々雑多とは、みぎわは想像していなかった。それらがのおのおの趣向^{しゅこう}をこらして、新部員を獲得^{かくとく}しようと頑張^{がんば}っているのである。彼女の前後左右を行く同じ新入生たちの中には、どこかのグループにつかまって説得されたり、自分から進んで入部の手続きをする者も、すくなくなかった。

みぎわは、しかし、呼びかける声にはかまわずに歩きつづけた。どうやらうまくQ大学の文学部に合格したので、これからはのびのびできる。どこかの部員になってもいいわけだが、今はまだ、それほど気にはなれなかった。本を読むのは好きだけれども……文芸部に籍^{せき}を置くほどの熱意はない。まあそのうちに、というのが、かけねのないところなのだ。

チャペルの横を通過して通用門に出ようとした彼女は、そこにもまたいくつかのサークルが、机を

出したりプラカードを立てたりしているのを認めた。

しかし、それらのサークルは、いずれも一風変わっている。ぬり絵をたのしむ会とか、マッチのラベル収集グループとか、宝さがし研究会とか……妙なものばかりであった。しかも、別に積極的に入会を勧誘しようとするのでもなく、たんに存在を知らせるだけで、興味のある人だけ来てくれという感じなのである。

そのひとつに、別世界研究会というのがあった。

別世界研究会？

みぎわは、これまでにいくつか、この世界とは別の世界に主人公が行った物語を読んだことがある。面白いものもあつたし、大したことはないものもあつた。が……現実以外にも別の世界があるという発想には、惹かれるのも事実だ。逃避かも知れないけれども、どこか夢があるからである。別世界研究って……いったい何をするのだろう。

彼女は、その前に立ちどまった。

というのも、そういう文字をしるした紙を垂らした机にすわっている男子学生も、横に立っている女子学生も、Tシャツ・ジーンズといったふつうのスタイルで、しかも落ち着いた感じだったからである。これが別世界研究会というだけに、浮世離れた隠者のような人たちだったり、馬鹿っ派手でキンキラキンの格好をしていたりすれば、やはり超俗を気取っている連中だということ、彼女が敬遠していたに違いない。それがむしろ常識的な印象なので……そうしてみる気になったのだった。

彼女が前に立っても、その学生たちはすぐには何もいわなかった。だから、みぎわのほうから訊いた。

「別世界研究って、何をするんですか？」

「この現実の世界以外の世界について、読んだり議論したりするんですよ」

男子学生が答えた。「それに、実験もやります」

「実験？」

「別の世界へ行ってみようと試みるんです」

女子学生がいった。「思念をこらしたり、これまでの文献に出て来る呪文を唱えたりして。別世界へ行こうという実験をやるわけ」

「へえ……。でも、本当にそんなこと、出来るんですか？」

「そううまくは行きません。今のところは、自己暗示によって催眠状態にはいり、その人の心理状態に応じた夢を見るぐらいです」

男子学生は、いうのである。「しかし、だからといって無意味ではありませんよ。ひとりひとりが、どんな世界観を持っていて、どんな世界を求めているか……十分、論議の対象になりますからね」

「——ははあ」

みぎわは、自分でも何を表現しているのかわからぬ声を出した。

相手の説明は、よくわからない。むつかしそうでもある。

だが、面白おもしろそうであった。面白おもしろそうだけれども……うっかり入ってしまったて、それがとんでもない団体だったりしたら困る。そういう危険なグループがあると、耳にしたことがあるのだ。彼女はためらった。

「何も、今ここで入会しなくてもいいのよ」

女子学生が、くだけた口調くちようになって、頷うなずいてみせた。「もし関心があったら、今度の会合に出て来て……いやだったら、やめればいいわ」

「これが、会合のスケジュール。六月までしか決まっていけないけどね」

そういって、男子学生が、机の上に積んであるチラシを一枚取って、みぎわに渡した。

「とにかく……読んでみます」

彼女はチラシを手し、その場をあとにした。

歩きながら読むと誰かにぶつかりそうだし、かといって、電車の中で別世界研究会というようなものを他の人に見られながらひろげるのも気がひけるので、結局、彼女がそのチラシに目を通したのは、帰宅してからのことであった。

チラシのはじめの部分は、別世界についての記述きじゆつであった。

それも、わりあいきちんと、正面から書いてある。

内容は——人間は昔から、この世のほかにもいろんな世界を想定そうていして来た。死後の国とか天国とか地獄とかもそうである。また多くの人々が、理想国と桃源郷とうげんきやうといったものを描いた。思想家の中

には、われわれがこういう社会を築かなければならないと説いた者もすくなくない。さらに、人類の破滅や文明の崩壊図も数多く提示されて来た。最近よく読まれるようになったSFが、実にさまざまな別世界を設定しているのは、ご承知の通りである、というところからはじまり、これまでそうした別世界へ行ったとされる例や、そういう報告がいくつか並べられたのち、転じて、われわれは感知しないけれども、この世界以外に、無数に別の世界があるのではないかということが、人間の内面世界や四次元の論理や、超能力などを引き合いに出して、論じられているのである。そして、そういう別世界への交通手段はあるのではないか、みんなで試みてみよう、また、われわれに望ましい別世界とはどういうものかを話し合ってみよう、ともあり、これは、意図的に現在の世の中をどうしようというものではなく、われわれはただ探索者でありたいのだ、とも付記されているのだった。

それから少し間隔をあけて、スケジュールが記載されていた。会合というのはほぼ一カ月に一回のわりで……この次は、五月の連休の間に、大学の近くの喫茶店の二階で行われるようである。それも、社会学部二回生の柴田大助というメンバーが自分の研究を発表し、場合によっては実験も行うとあるのだった。ひやかし大歓迎ともしるしてある。

読んでいるうちにみぎわは、だんだんとそういうことがあり得るような気分になって来た。たしかに、面白そうなのだ。

行ってみよう、と、彼女は思った。

休日ではあるが、クラブ活動に出て来ている者がたくさん居るせいか、大学の近辺は案外活気を呈している。

正門を過ぎて二分ばかり行ったところに、その喫茶店はあった。

入ってみると、二階への階段には、本日夕方まで貸し切りという札がかかっている。

みぎわは、二階へあがった。

あがり切ったところに、受付が設けられている。受付でチラシに予告されていた通り、会場費を徴収するのだ。

そこは、テーブルが一方方向に並べられていて、十七、八人がすでに集まっていた。

彼女が空いた席につくと、店の人がコーヒーを運んで来た。

五分ばかり経つと、みんなの前方の壁ぎわに、この間の男子学生が立って、いいはじめた。

「きょうは、よく来てくれました。——といっても、会員の半分しか来ていないんだからなあ。でも、会員でない方も二、三人おられます。ひやかし大いに結構。ぼくたちの会がたのしかったら、ぜひ入会してください。それでは早速はじめましょう。きょうは、柴田くんが発表をしてくれます。柴田くんに拍手！」

みんな拍手した。

背の高い、めがねをかけた学生が立ちあがって、壁ぎわに出て来た。

「ぼくは、ある呪文じゆもんと超能力の結びつきが、別世界への移入を可能にするのではないか——ということ話を話したいと思います」

柴田という学生は、ノートを見ながら喋りだした。「これまでぼくたちは、別世界へ行ったに違いないという、いくつかの例を調べて来ました。チャールズ・フォトはむろんのこと、その他の研究家があげているさまざまなケースをです。ぼくはその中に、共通した条件を持つ一群があるのではないか、と、考えたのです」

「……」

「古代エジプトの記録に、何人かの神官しんかんたちが突然行方不明になったというのがあると、この前、川井くんが報告しました。常識的解釈としては、それは当然権力争いのとばかりを受けて消されたのだとされていますが……中には、それでは説明不能のものがあるというのも、川井くんの指摘してき通りです」

何やらむつかしくなりそうだと、思いながら……しかし彼女は、黙だまって聴きいているしかなかった。

「その古代エジプトの記録の大半が、のちの戦火で喪うしなわれたのは、歴史の示す通りです」

柴田という学生はつづける。「しかし、十九世紀のナポレオンに従軍した考古学者がひそかにある記録を持ち帰り、しまい込んだということを、その子孫が発表したことは、この会でも話し合われました。ネザイア・フルージュというアカデミーのメンバーです。そのときにはエジプトの文字

もすでに解読されてしまったから、内容も一応はわかりました。はるかなる国に至る聖なる言葉だということ……ただ、どう発音するのかは、そのときにはわかりませんでした。フルージュ自身も、このことを発表はしたものの、それは逆に怪しげな説をなすものとして非難され、沈黙してしまっただけです。——いや、こんなことは、今さらここで繰り返す必要はないでしょう。話をはしります」

柴田という学生は、ノートに視線を落とした。「この聖なる言葉——一般にはヌクテオミカと呼ばれる呪文が、どういう発音で唱えられたか、長い間わかりませんでした。ただ、研究家の幾人かがそれに成功したのかどうか、行方不明になっています。そして三年前、コンピューターを駆使することで、これはこう発音されたのではないかという説が、アメリカのニールス・A・ジョッドによって発表されました。その後、われわれの知る限りでは、十四名がこの呪文によって別世界に移入したとされています。そのうち九名は行方不明になり、三名がこの世界に還って来ました。しかし、戻って来た三名が話した別世界というのが、それぞれことなっているとところから、本当に行つたのかどうか、疑問を持たれているのも事実です。そのうちのアート・レンチェルという女性は、別世界でいたためつけられたといい、服はぼろぼろになり、あちこちに傷がありました。が、消失したときも戻って来たときも目撃者がいないために、疑問視されています」

柴田という学生は、声をはりあげた。「しかしぼくは、別世界へ行ったという人々に関する記録を調べてみて、かれらの何人かが、かなり強い超能力を持っていたのではないかと、考えたのです。たとえば今のアート・レンチェルは、ときどき予言まがいのことをして周囲を驚かせたよう

すし、ほかにもテレパシーを持っていたのではないかと思われる言動げんどうがあつた人もいますし、ドン・ライサンなどは、実際に奇術師でした。それも、カードの透視とうしで有名だったといひます。で……ぼくは、記録に残っていないなくても、別世界に行った人のすべてが、何らかの超能力を持っていた……自分では気づかなくても、そういう力があつたのではないかと、思うのです。そして、ヌクテオミカは、そういう超能力を持った人でなければ、効果を發揮しないのではないかと、考えたわけです」

柴田は、そこで話をやめ、横にいた女子学生に合図をした。その女子学生は、みんなに紙片しへんをくばりにかかった。

みぎわも受け取った。

ハノクレヤ ミシヌゲヨリガ カクカケロスノシオ デオ レ

と、書いてある。

「それが、ヌクテオミカです。もちろん、日本語ではちゃんと本物通りには書けません。英語でもです」

と、柴田。

「これを、そこまではまだよくわかりませんが、ある時間のうちに、ちゃんと発音すると、効力を發揮するといわれています。話によれば、八秒から八秒半という説もあるそうです。——これで、きょうのぼくの発表を終わります」

いうと、柴田は、自分の席に帰った。

3

代わって、はじめの男子学生が、またみんなの前に立って、口を開いた。

「柴田くんの今の話、どうですか？ 実験をやりますか？」

「でも……ほんとなの？」

ひとりの女子学生がいった。

「ほんとかどうかは、やってみなきゃわからないさ」

はじめの学生は、笑った。

「でもさ、この場合、どこかへ行ってしまったら、どうして帰って来るんだよう？」

別の学生が声を出した。

「ああ。そいつをいうのを忘れていた」

柴田が腰を浮かした。「ヌクテオミカによる別世界行きは、帰還きかんしていかないほうが多い。だから、自動帰還はないわけだ。ぼくとすれば、こないましい世の中には、あっさりとおさらばして、もっと自分の可能性を試ためせる世界へ行きたいから、帰還は考えていなかったんだが……戻もどって来た主張する人たちは、ヌクテオミカのはじめのハノクレヤを飛ばして唱となえたそうなんだ。原典げんてんにも、はるかなる国より現世にたちもどらむとき、その頭をはねるべし、と、あって……そうしてみたら、うまく行ったというんだがね」